

と思うのであるが、そうとすると、厳密には第一本の三まで、「一天四海ニ榮花ヲ開」いたことを精一杯伸ばして孫にまで及ぼしたとして第一本の二十「重盛宗盛左右ニ並給事」までが「得長壽院供養事付導師山門中堂、藥師之事」と関りを持つてことになる。

「得長壽院供養事付導師山門中堂、藥師之事」が構想上、影響を及ぼしているのは、せいぜい第一本の二十から二十三あたりまでであり、中で、第一本の八あたりまでが緊密な関係にあると言えよう。その中においては、鳥羽上皇は山王大師七社権現の守護を受けて、良い世を送られたとされているのではあるまいか。

延慶本における、得長壽院供養後の鳥羽上皇の描かれ方から、その構想の範囲に及んでみた。御批評を賜れば幸いである。

（注一）水原一『延慶本平家物語論考』第四部「歴史的関連」中の「院中の人物」二、北面の考証に依った。

（注二）『説林』23（昭和四九年一二月）

〔論文受理 昭56・9・3〕

〔久安五年以後〕

⑨安芸守であった平清盛に、高野山の大塔の造進を命じた

(第二^中 入道嚴島ヲ崇奉由來事)

〔保元元年〕

⑩御晏駕の後、兵革がうち続き、政情不安に陥った

(第一^本 主上々皇御中不快之事)

(注) 記事には①～⑩の通し番号を付けた。

次に、右の記事から、法皇が守護されたと見なされそうなものを抜き出して、説明・考察を加えてみよう。

①季範・季頼は文徳源氏の末流で坂戸源氏と呼ばれている。季範の父、康季が北面の最初の一人となって以来、代々北面となる者が続いた。「伝奏」は外部の請願の取次ぎ・奏問や院の意向の外部への通達といった、重要で権威ある仕事であった。普通は院司別当中の納言・参議・弁官がこれに当たり、北面の武士が当たるのは稀であった。^(注)季範・季頼が「伝奏」に当たったのは、格別の振る舞いであった訳だが、鳥羽上皇の時代は「皆身ノ程ヲ振舞テ」いたということだから、秩序の保たれていた、肯定できる時代であったということになる。

⑧藤原顯頼が逝去したのは、久安四年正月五日のことであった

(「公卿補任」)。その為に、八幡社への御幸を延ばし、御遊を

止めたということであるから、鳥羽上皇は臣下に情のあつい方であったということになる(清盛の立場からすると、その程度は

あつてしかるべきという気持ちであろうが)。清盛が特に鳥羽上皇をあげたのは、君に君たる振る舞いがあつた、肯定すべき御世としてである。

⑩『愚管抄』の「鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ亂逆ト言コトハヲコリテ」といった表現に似ているが、『愚管抄』が「日本國ノ亂逆」の起こりを追求し、鳥羽上皇の時代に保元の乱が孕まれていたことをみごとに分析しているのに対し、平家物語は兵革の有無だけに注目しているので、鳥羽上皇の存生中は平和で、安定した世であつたかのようである。

右の考察から、鳥羽上皇が山王大師七社権現の守護を受けて、良い世を送られたという記事は、せいぜい、延慶本の第一^本の二十三あたりまでであるということが言えよう。

⑧は、清盛の主張であることを抜きにできないし、しかも、第一^本の三十にある⑦において、鳥羽院は「以レ非為レ理」処置を山門の衆徒にとらされているので、第一^本の二十三をそう下ることは出来まいと考えるからである。

渥美かをる氏は「延慶本平家物語の特殊な性格——ぬきさしならぬ重要な説話の存在について——」^(注)において、「忠盛を叙する部分が不可思議な供養譚を中軸として描かれ、忠盛の昇殿も繁栄も往生も、すべてがその御利益であるとする構想に従つて編成されている」と指摘された。渥美氏の細かに読み解かれたことは、疑いをいれない

「堂供養説話の考察」（『延慶本平家物語論考』昭和五四年

六月）

（注三）拙稿「延慶本『平家物語』と『源平盛衰記』——住吉明神

関係記事から——」（『人文』第五号・昭和五六年八月）

を参照されたい。

（注四）「延慶本平家物語に見る山王神道の押し出し」（『愛知県

立大学十周年記念論集』昭和五〇年一二月）

（注五）注三の拙論

一一

「無縁貧道ノ僧」は鳥羽上皇の「善根ノキヨサ」に感動して「南無山王大師七社権現慈悲納受ヲ垂レテ清浄ノ御善根修行シ給ヘル法皇ヲ守護シ進セ給ヘ」と祈ったのであるが、得長寿院供養後の鳥羽上皇について、平家物語がどう描いているか、延慶本について見、構想の及んでいるところを考えてみたい。

まず、鳥羽上皇関係記事を年代順にあげてみると、次のようになる。

〔年代不明〕

①源季範・季頼父子が北面の武士として、近く召し使われ、伝奏する折もあつたとのことであるが、皆、身の程をこえることはなかつた

（第一本 五條大納言邦綱之事）

②奥州から砂金が千両献上されたので、中国の国王へ贈った。その返礼として袴竹が届けられたので、覚祐僧正に加持させて、笛に

作られた

（第二中 宮蟬折ヲ彌勒ニ進セ給事）

③鳥羽殿を建てられて、そこで興福寺の常楽会を催されたが、本寺のものには及ばないという評判だったので、二度と試みられることはなかつた

（第三本 興福寺常樂會被行事）

④位を譲られた後、伊勢神宮に公卿の勅使をたてられた

（第四 四宮踐祚有事）

〔長承元年〕

⑤五節豊明の節会の夜、闇打ちに失敗した殿上人が、平忠盛の狼藉を訴え出たが、問いただしてみると、極めて周到な振る舞いであつたことが判明したので、むしろ、忠盛の武人としての力量を誉めてとらした

（第一本 闇打事）

〔保延元年〕

⑥清盛が十一歳の四位兵衛佐と評判されていたのを、世間の人々が「花族人」でもないのにと非難したので、「清盛モ花族ハ人ニ劣ヌ物ヲ」と仰せになつた

（第三本 太政入道白河院子ナル事）

〔久安三年〕

⑦白山平泉寺を蘭城寺に付けようとしたところ、山門の衆徒が騒動し、奏状を献じたりしたので、公卿僉議をひらいて、遂に、山門に付ける旨の院宣を發した

（第一本 以平泉寺被付山門事）

〔久安四年〕

⑧民部卿顯頼が逝去したので、八幡社への御幸を延ばし、御遊を止めたとのことである（第二本 院ヨリ入道ノ許へ靜憲法印被遣事）

という思いが唐突に浮かぶ。その直後に、「無縁貧道ノ僧」が尋ねて来るのである。不可思議な気配が漂っていたことを忘れてはなるまい。又、「無縁貧道ノ僧」を導師として選んだ後も、上皇は、当日四方輿を遣したりして、僧に「争力有名無実ノ虚假ノ相ヲハ現シ候ヘキ」と窘められている。つまり、上皇は一貫して神明仏陀の導きのままに、「善根」へと導かれていったのではないか。本説話は、上皇の「善根」発見の物語というべきである。

延慶本に山王社（大宮、二宮）を拠りどころとした、「憍慢」を誠める仏教思想が反映していることはまちがいない。山下氏が「聖の世界」を見、渥美かをる博士が「山王神道の押し出し」を認められたのは、この仏教思想の二要素をそれぞれに見出されていたのだ^(注四)と言えないであろうか。

ここで、諸本の状態に視点を移すと、延慶本・『源平盛衰記』（後は、『』を付けない）の「法皇御灌頂事」は、比叡山と住吉明神との結び付きが見られるところに長門本と対照される点があった^(注五)。従って、源平盛衰記において本説話が改作された背景は、まず歴史資料を参照した時に「僻事歟」と判断されたこと、次に本説話に直接住吉明神が登場していないことに求められなければならないのではないか（筆者は、源平盛衰記の祖本にあった「得長壽院供養事」は「異説」の方ではないかと考えている）。とすれば、改作時、「憍慢」を誠める仏教思想は住吉明神（大宮、東竹林）と関りあるものとしては受け取られなかったということになってくる。

因みに、長門本に本説話がおさめられていることも、「憍慢」を住吉明神と直接の関係を持たないものとする立場を伝えるもののように思われる。

(丙) 六番目

延慶本の「東大寺供養事」（高橋伸幸著『平家物語筋記 長門本の名称に依った）は、冒頭の山下氏論の引用部（その紹介の仕方）に示されているように、二つの部分から成るものごとくである。

鳥羽上皇の御願寺の導師は、「東大寺供養事」を参照すれば、これも又、「小國ノ比丘不相應セ」という事であったかと考えられてくるのであるが、山下氏の指摘される「鳥羽院の善根の賛美」ということは、この類話によって補われるところが少くないのである。

右の(甲)から(丙)の考察、検討の結果をまとめると、次のようになる。本説話における「善根」という言葉は、まず、(甲)の物質の給付についてのものと(乙)の「無縁貧道ノ僧」の登用についてのものの二面を持っている。

(甲)は、更に、偏らないことと量の多いことを要因とするものに分かれるのであるが、筆者は、その前者の要因に興味を感じた。

(乙)に関しては、本説話が鳥羽上皇の「善根」発見の物語という性格を持っていることや、「法皇御灌頂事」と密接な関りを持っているのではないかとこのことを指摘した。

(注一)・(注二)

されていると考えられる。

(乙) 二番目、三番目と五番目

筆者が二番目、三番目と五番目を一類にして纏めたのは、これらでは「善根」に必ず「清浄」、「キヨサ」といった修飾語が付くからである。

この「清浄」・「キヨサ」は、三番目であげられているように、鳥羽上皇が「態ト無縁貧道ノ僧ヲ供養セサセ給」うたことを評したものと認められる。そこで山下氏は、この説話の「基盤としては、既成の教団とは異次元の、いわば聖の世界を踏まえることが推測されよう」と述べられている。

さて、延慶本の「無縁貧道の僧」という言葉であるが、これは「高位ノ僧」に対するものとして使われて居り、「下賤」・「貧窮」の僧の意味と考えられる。従って、「無縁貧道」の本来の意味からずれた、俗臭の漂う言葉となっているように感じられる。

論を落としてしまうが、『耀天記』の「智證大師傳」を引いた箇所

但叡山地主明神以弘道之寄深詫於貧道

(注) 『耀天記』は續群書類聚本に依った。

という文がある。勿論、ここの「貧道」は大師自身を指す言葉であるが、半可通がこの部分だけを見ると、「地主明神」と「貧道」を短絡して、奇妙な話を作り出すこともあり得はしまいか。延慶本の「無縁貧道」の俗臭には、そんな誤解が含まれていないかと考えさ

せられもするのである。

話をもとに戻すが、「高位ノ僧」には「種姓高貴」の外に「智者」、「能説」という「器量」があった。彼等が籤に落ちたのは、これらに関する「吾コソ天下第一ノ名僧ヨ 吾コソ日本無雙ノ唱導ヨ」という「憍慢の幡幢」にあつたことはまちがいない。その「憍慢」が「冥ノ照覧」に発かれる、そして、「寶ノ山」の「寶」取り競争に敗れるという発想であるが、ここで思い起こされるのは「法皇御灌頂事(第二本 一二)の一節である。^(注三)「法皇御灌頂事」においては、任吉明神から「憍慢」を誡める法話が延々と発せられていた。「憍慢」を発き、誡める主旨といい、二宮という山王七社の一つに関つては点といい、このところが「法皇御灌頂事」に通じるものであることは間違いないと思われる。

以上のことから、延慶本の「無縁貧道ノ僧」という言葉は、「憍慢」の問題を背後に秘めながら、身分上の用語として使われているということになる。

ところで、この「無縁貧道ノ僧」を落慶供養の導師として選ぶという「善根」の次第であるが、鳥羽上皇は、最初からこのような考えを持っていた訳ではない。思いも寄らず、天台座主に固辞され、「器量ヨ」と考えていた「十三人ノ智徳」には空籤を引かれて、途方にくれてしまっていたのである。そこに、

必シモ智者ニ非ス能説ニ非ストモ種姓下劣ナリトモ心ニ慈悲アリテ身ニ行徳イミシク天下第一番ニ貧シカラム僧ヲ導師ニ用ハヤ

トカクシテ儲ケタリシ松ノ葉モハヤ乏ク成リヌナニヲモテ
カ露命ヲモ支ヘキアハレハヤ御仏事ノ日ニ成カシサテモ目
出キ法皇ノ御善根ノキヨサカナ南無山王大師七社権現慈悲
納受ヲ垂レテ清浄ノ御善根修行シ給ヘル法皇ヲ守護シ進セ
給ヘ

つまり、生活困窮した乞食僧が堂供養の導師を勤める事によつて持直す事ができるというのである。導師になれば当然給付されるべき布施を意識している事はいうまでもない。それが法皇の「善根」の実体であるべきなのである。

という考察^(注一)があり、この類に加えるべきところがあることが既に指摘されている。

さて、同じく物質の給付ということで括れるとはいっても、一目と四番目とはその意味合いが異なっている。

筆者は、一番目のものは「ホトホトニ随テ勸賞ヲ蒙」ったところに「善根」が認められているのではないかと考える。水原氏はこれを「いわば下級の労働者の勸賞を力説している^(注二)」と受け取られているが、「結縁経営ノ人夫マテモ」の語句は、そのような点と同じ程度に、或いは、それ以上に、関った人全てに「勸賞」が及んでいるという点で注目すべきではないかと考える。その点で対照的な内容になっていると考えられるのが「於延厂寺薬師経讀事」(第三^末十五)である。その「布施」の分配の様以下の部分は一

人シテアマタヲ取ル法師モ有 又手ヲ空シテ取ヌ者モ有ケリ

鳥羽上皇の「善根」

然間行事官ト法師原ト事ヲ出ス 主典代广官帽子打落サレ
テ散々ノ事ニテソ有ケル ハテニハ主典代ヲ捕メテ山ヘ登ニケ
リ 平家ノシトスル神事仏事ノ祈ノ一トシテ驗ハナカリケリ

(注) 長門本の校異を延慶本本文の右側に示した。猶お、延慶本は古典研究會叢書影印本に、長門本は古典資料研究会影印本に依った。

となつている。「平家ノシトスル神事仏事ノ祈ノ一トシテ驗ハナカリ」
つたのは、「布施」の不平等に発した騒動のせいというような書き
ぶりである。これを対照させれば、関った者全てが整然と「布施」
の恩恵に預る程であるならば、「仏神威光猶以嚴重也」と評される
靈験も生じうるといふ編著者の思想もみえてこよう。すなわち、筆
者は、一番目のものは「於延厂寺薬師経讀事」と対をなす内容であ
り、その整然とした分配が「真実ノ御善根」を証し、後の靈験をも
つともなごととして落ち着かせる働きをしていると考えるのである。
次に、四番目のものであるが、ここでは確かに、山下氏の指摘の
とおり、「品の多いこと」が「善根ノ志ノ深」さを証するものとさ
れている。

延慶本の記述には「破綻がない」が、長門本では、僧が「御ふせ
ハむへんのくとかとなれとて非人ともに給ハリ」、自分達は一つず
つしか取らなかつた となつているので、ちぐはぐな印象を受ける。

以上のことから、物質の給付は、対導師、対関係者の二面で追求

よう。

④ 供養の布施として院より賜った品の多いことについて、

「善根ノ志ノ深ニハ御布施ノ色ニ顕レタリ」と讚嘆する。この直後に『伊勢物語』から引かれる、高子の葬儀に関して布施の多かつたことを語る説話も、この鳥羽院の「御布施ノ色」を顕揚するために引かれたもので、その意味で、この高子の類話は延慶本の本文に即して破綻がない。

⑤ 供養の後、貧僧が、実は薬師如来の化身であったことが判明するが、この薬師の加護を受けたことになる鳥羽院に關し、地の文で「世已ニ末代タリト言ヘトモ願主ノ信心清浄ナレハ仏神威光猶以嚴重也法皇ノ御心ノ中サコソウレシク思食ケメ」として、やはり願主である鳥羽院を讚美している。

⑥ この度の供養の類例として、聖武天皇による東大寺供養の話を持ち込むが、

ソレ（東大寺供養の際の不思議を指す）ヲコソ奇代ノ不思議ト承ニコレハ猶勝レタリ……今此得長寿院ヲハ……遙ニ昔ノ聖跡ヨリモ当伽藍ノ効驗ハ勝レ給ヘリト万人皆所奉讚也

つまり、今回の聖儀の効驗が、聖武天皇による東大寺供養のそれよりもすぐれていること、ひいてはその願主である鳥羽院の善根の讚美に延慶本編者の意図があると見られる。

このように、得長寿院落慶供養の話は、終始一貫して、得長

寿院をその御願寺として発願建立し、更にその清浄な心のゆえに、仏意を受けて、憍慢な高僧ではなく貧道第一の聖僧を導師とした鳥羽院の、その善根を描いたものと言える。

本稿では、この山下氏の御考察を手懸かりにして鳥羽上皇の「善根」の問題を掘り下げ、拙稿「得長寿院の靈驗譚について」^(注二)の考察を補い、かつ、深めてみたい。

(注一) 「『平家物語』構想論のために——「得長寿院供養事」をめぐって——」(『名古屋大学文学部研究論集』文学二四号・昭和五二年三月)

(注二) 『鹿兒島県立短期大学紀要』第二八号(昭和五三年二月)

一

山下氏が「造進の功を……鳥羽院の善根として説くことにある」と判断された根拠六つを、筆者は

- (甲) 一番目と四番目
- (乙) 二番目、三番目と五番目
- (丙) 六番目

の三種類に分けて、その各種類ごとに考察を加え、検討してみたい。

(甲) 一番目と四番目
筆者が一番目と四番目を一類として纏めたのは「勸賞」・「布施」といった物質の給付が「善根」の実質をなしているからだが、その点では、二番目のものにも、水原一氏に

鳥羽上皇の「善根」

——延慶本『平家物語』の「得長壽院供養

事付導師山門中堂ノ
薬師之事「について——

橋口晋作

延慶本『平家物語』（後は、延慶本と略称する）の「得長壽院供養事付導師山門中堂ノ
薬師之事」の意図については、山下宏明氏に、次のような詳しい考察がある。(注二) 少し長くなるが、その部分をそのまま引用したい。

言うまでもなく、この説話には、何らかの形で延暦寺とのかかわりが想定される。しかし、だからと言って、これをただちに叡山の顕揚をはかる話とも即断しがたい。延慶本（長門本）の編者には、この叡山の顕揚ともかかわりを示しながら、むしろ別の所に、この説話を持ち込んだ意図があったように思われる。それはこの得長壽院造進の功を、その造進者の忠盛よりは、むしろこれを、願主である鳥羽院の善根として説くことにあるようである。すなわち

① 冒頭、得長壽院の造進について勸賞の行われたことを描く所で、結縁経営の人夫までもが賞を賜ったことを言い、これを

「真実ノ御善根ト覺タリ」とする。この場合の「御善根」を施した主体が鳥羽院であることは、

仍天承元年亥辛三月十三日辰甲吉日良辰ヲ以テ供養ヲ被遂畢ヌ

忠盛者一身ノ勸賞ニハ備前国ヲ給ル其外鍛冶番匠杵師惣シテ結縁経営ノ人夫マテモホトクニ随テ勸賞ヲ蒙ル事真実ノ御善根ト覺タリ

という文脈から見て明らかである。

② 導師に決った乞食僧が、使者に後をつけられるのも知らずに、地主権現の大床にもぐり、松の葉を服しながら、「サテモ日出キ法皇ノ御善根ノキヨサカナ」と感じ、山王大師に「清浄ノ御善根修行シ給ヘル法皇ヲ守護シ進セ給ヘ」と念ずる。「キヨイ」(ママ)「清浄ノ御善根」がいかなる事を指すかは、やがて明らかになるであろう。すなわち、

③ 供養当日、貧僧のもとへ迎えに、公卿や高僧の使用する四方輿をよこすが、僧は「而今ハ態ト無縁貧道ノ僧ヲ供養セサセ給清浄ノ御善根也争カ有名無実ノ虚仮ノ相ヲハ現シ候ヘキヤ」と言って、乗るのを拒む。ここにも、前述の十三人の傲慢の貴僧との対比が見られるわけで、かれら高僧たちの日常に見られる有名無実の虚仮を排する院の姿勢を清浄なる善根とすることが明らかである。この事からも、この説話が、単に延暦寺の顕揚を志向するものではない、むしろその基盤としては、既成の教団とは異次元の、いわば聖の世界を踏まえることが推測され